博士学位論文審査要旨

２０１８年１２月２７日

論 文 題 目：　笑いが描く人々―コント番組を事例に―
学位申請者：　石田　万実
審 査 委 員：
　主　査：　社会学研究科　　教授　　佐伯　順子
　副　査：　社会学研究科　　教授　　竹内　長武
　副　査：　京都産業大学現代社会学部　客員教授　伊藤　公雄

要　　旨：

本論文は、日本のテレビ放送開始以来、現在まで続いている「お笑い」の要素を含む番組について、特に「バラエティ番組」に含まれる女装を含むコントに焦点をしぼり、ジェンダー論の視点から研究したものである。

本論は全六章から構成されおり、第一章ではテレビにおける「笑い」を第一期（1953-1967 年）、第二期（1968-1979 年）、第三期（1980-1987 年）、第四期（1988-1997 年）、第五期（1998-2013 年）に時代区分し、代表性があると判断できる番組を映像資料が残る各期から四番組抽出（『8 時だョ！全員集合』『オレたちひょうきん族』『ダウンタウンのごっつええ感じ』『笑う犬の冒険』）し、内容分析を行った。

方法としては、研究対象としたコントの登場人物を性別、演者、職業、異性装の有無の項目表にまとめ、放送当時の日本社会における職業の男女比率や男女の役割に関する世論調査と比較検討するとともに、各コントにおけるジェンダーに関連する台詞、動作、笑いが生じる場面に質的分析を加えた。その結果、各期に共通して、女装によって演じられる母親が、妻・母の役割を誇張されることで風刺としての笑いを生み出し、女性が演じる母親は逆に、「良妻賢母」の役割を果たさないことが批判的笑いの対象になることが明らかになった。あわせて、第三期以降、女性への性的いやがらせや、男性同性愛が笑いの対象となり、バブル崩壊から「失われた十年」にかけて放送が開始された第四期以降の番組では新たに、夫・父の威厳を風刺的な笑いの対象とし、人生について考察させる新しいメッセージ性が含まれるようになったと指摘している。

結論として、日本のテレビ番組にみられるお笑い要素を含むコントにおいては、ステレオタイプな＜女性性＞＜男性性＞から逸脱した登場人物が批判的な笑いの対象になるとともに、登場人物自体の女性割合が少なく、保守的なジェンダー規範を含んでいることが明らかになった。

各期におけるより詳細な変化についての検討、西日本と東日本の「お笑い」文化の違い、放送局ごとのメッセージ性の相違など、残された論点もあるが、日本のテレビ番組において重要な位置を占め続けているにもかかわらず、先行研究の少ない「お笑い」について、総計 754 例のコントの詳細な映像分析を通じて、日本のテレビメディアが保守的なジェンダー規範を刷り込むメッセージを含んでいることを明らかにした本論文は、現在、国際比較上も低位置にある日本社会のジェンダー・ギャップを解消するためのメディア情報の改善策を考える上でも、極めて重要な問題提起を含んでおり、社会的にも意義のある成果をあげている。よって本論文は、博士（メディア学）（同志社大学）の学位を授与するに十分にふさわしいと認めることができる。

総合試験結果の要旨

２０１８年１２月２７日

論 文 題 目：　笑いが描く人々―コント番組を事例に―
学位申請者:　石田　万実
審 査 委 員：
　主　査：　社会学研究科　　教授　　佐伯　順子
　副　査：　社会学研究科　　教授　　竹内　長武
　副　査：　京都産業大学現代社会学部　客員教授　伊藤　公雄

要　　旨：

学位申請者石田万実は、上記審査委員３名とともに、同志社大学渓水館１階会議室にて、2018年12月18日（火）午前10時より11時まで公開学術講演会を行い、引き続き同会議室にて、午前11時より12時まで口頭試問・語学試験（英語）を行った。メディア学、お笑い文化、ジェンダー論についての質疑に対し、申請者は的確に回答し、当該分野ならびに関連領域についての深い知識と理解を有していることが示され、また、語学試験(英語)においても、専門分野に関連する十分な語学力を有していることが確認された。

以上により、本学位申請者の総合試験の結果は合格と認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 笑いが描く人々―コント番組を事例に―

氏　　名： 石田　万実

要　　旨：

1953 年のテレビ放送開始以来、絶えず笑いの要素を含んだ番組が放送されてきたにもかかわらず、テレビにおける笑いの分析を行った研究は少ない。常識を相対化するはずのお笑いがジェンダーにかんしては常識に従うとの指摘があり（澁谷, 2005）、新たな現実を作り出すバラエティ番組をジェンダーの視点で捉える新たな方法が期待されている（国広, 2012）。そして、バラエティ番組は特定の番組に限定すれば、独自の分析枠組みを設定することができる（萩原, 2004）といわれている。このため、本研究はバラエティ番組のなかでも、女装を利用した笑いが多く見られるコントを事例に、ジェンダーの視点から、笑いを通して日本のテレビメディアが人々をどのように表象してきたのかを分析する。イギリスのあるシチュエーションコメディ番組は放送時間帯が午後 9 時以降から午後 8 時に移動したことで、その描写が慣習的に画一化したものに移行したことが示された（Medhurst & Tuck, 1982）。このため、第 1 章でテレビにおける笑いを、第一期（1953-1967 年）、第二期（1968-1979 年）、第三期（1980-1987 年）、第四期（1988-1997 年）、第五期（1998-2013 年）に区分し、第一期を除く各時期から、週末の午後 8 時台に放送された番組をひとつずつ選出し、DVD の本編に収録されたコントを分析対象とした。

分析は以下の手順で行った。①番組ごとにすべての研究対象とするコントの登場人物を性別、演者、職業、異性装の有無などの項目を作成した表にまとめて、それをもとに番組全体の傾向を把握する。②各コントにおけるジェンダーにかんする台詞や動作、笑いが起こる場面を記録する。③記録をもとに（I）家族のやりとりを描いたコントにおける主に妻・母と夫・父の表象、（II）女性労働者が登場するコントにおける女性労働者の表象、（III）このほかのコントや場面における番組が描くジェンダーを明らかにするうえで重要な登場人物の表象を分析、考察する。④最後にそれぞれの番組の分析結果を比較し、時代による変化を明らかにする。そして、テレビ番組が笑いを通してどのようなジェンダー規範を示してきたのかを検討したい。

第 2 章から第 5 章では分析対象とした番組のコントの内容分析を行った。第二期の『8 時だョ！全員集合』は、家族を描いたコントで「夫は外で働き、妻は家庭をまもる」という役割分業を示していることがわかった。特に、子供の世話と食事の用意を妻・母の重要な役割とし、笑いを通して父の子供をうまく教育できない姿や、子供の世話によって仕事に支障が出る様子を描くことで、子供の世話や教育にふさわしいのは母であることが示された。一方、「女らしさ」のステレオタイプを演じる女装による妻・母の、誇張された家族に尽くす姿は風刺の効果を果たしていた。しかし、女性が演じる場合は、夫の期待する役割を果たさない妻・母であり、批判され、笑われることで反面教師となっていた。女性労働者のうち「女らしくない」職業の女性の一部は、仕事がうまくいかない、あるいは被害に遭う様子を笑いにされ、否定的に描かれていた。全体的に女性は従順な人物とされ、男性の期待に応えない場合は、批判の対象となっていた。男性労働者を中心とするコントでも、指示をする上司と指示に従う部下が登場するが、その描写から職場の上司と部下よりも、家庭における夫と妻など、男性と女性の間の権力関係の方が強固なものとされていた。番組の傾向として、しばしば性別や年齢、立場に見合った行動をとるように伝えていたが、なかでも「女らしさ」は強調され、そうあるべきことが笑いを通して示されていた。

第三期の『オレたちひょうきん族』も、家族を描いたコントで「夫は外で働き、妻は家庭をま

もる」という役割分業が示されていた。また、妻・母に限らず女性が男性の身の回りの世話をし、婚姻関係のない男女においても女性は男性に仕事をすることを求めていたため、この番組の登場人物に期待される役割は性別によって決定されているといえる。妻・母が役割を果たさない場合は、笑いの有無を問わず、否定的に描かれていた。女性労働者については、女性が「女らしい」職業の女性を演じる場合は、笑いを起こさずに「自然」な光景として描かれていた一方、女性が「女らしくない」職業に就くことは否定的に表現していた。また、女性が性的な嫌がらせをうける様子を笑いにし、男性が女性に美しさと若さを求めていることが示され、その期待から外れる女性は笑いの対象となった。以上より、『オレたちひょうきん族』は生活態度だけでなく、外見においても男性の期待に応えない女性を、笑いを通して批判することで、女性は男性に従うべきであると伝えていたといえる。

第四期の『ダウンタウンのごっつええ感じ』は、家庭を描いたコントにおいて、妻・母が家事や夫の世話をすること、夫の理解者であること、「家庭をまもる」役割を担うことは、ほとんどのコントで笑いの対象とならず、「当たり前」の光景としていた。子供の教育は両親の役割としていた。婚姻関係の有無にかかわらず、家事や男性に尽くすことを女性の役割、女性を守ることを男性の役割としていた。妻・母よりも夫・父の役割を笑いの題材とするコントが目立ち、家族を守る父や、威厳を見せるために強くあろうとする父を誇張することで風刺する場面もあった。女性労働者については、「女らしくない」職業を除き、女性の仕事に対する態度や能力はほとんど否定的に描かれず、特に女性が演じる場合は、働く姿が「自然」な光景となっていた。一方で女性労働者に注意や意見をされること対して男性が不快感を示すこと、身体や性にかんする描写、セクハラを笑いにすることで、男性は女性に従順であることや美しくあることを求めていること、男性にとって性の対象であることを、仕事と笑いを通して示していた。また、男性については同性愛や同性愛にかんする表現を笑いにし、なかには差別的に描くコントもあった。以上より、『ダウンタウンのごっつええ感じ』は男女どちらについても、期待される役割や容姿、性指向について、笑いを交えながら伝えているといえよう。

第五期の『笑う犬の冒険』は、家族を描いたコントにおいて、家族を思いながら仕事をする父、家族を守る父、父を待ちながら家をまもる母と娘、父に尽くす母を「理想」としていることがわかった。夫・父に尽くす妻・母が異なる面を見せて意思を表明したり、役割を果たさなかったりすると、笑いの対象となり、否定的に描かれた。一方、婚姻関係にない場合は、男性が女性に尽くす様子が笑いを起こさずに「自然」な光景として描かれ、役割が逆転していた。夫・父については、家族を守る父を理想化する一方で、役割を果たしても報われない様子や、娘が悲しむ様子を、笑いを交えて描くことで風刺する場面もあった。架空の世界を描いたコントでは、理想とされる家族は描かれていないが、放送当時の世論調査の結果と比較すると、放送当時の日本社会を背景としたコントよりも、架空の世界を舞台としたコントに当時の社会を反映した家族が登場したといえる。女性労働者については、「女らしくない」職業に就く女性は批判的に描かれていた。ほかのコントにおいても、「女らしくない」行動をする女性は、笑いや批判の対象となっていた。このため、『笑う犬の冒険』は女性に「女らしく」あることを求めていると考えられる。また、「男らしくない」男性についても、男性同性愛者がその象徴とされ、否定的に描かれていた。性的な嫌がらせを笑いにすることで、女性が男性にとって性の対象であり、性的な弱者であることを示していた。また、女性に美しさを求め、容姿の醜さは笑いの対象となっていた。以上より、『笑う犬の冒険』において、理想であることには変わりないが、特に未婚の若い世代や架空の世界では、男女それぞれに期待される役割は絶対的なものとはしていないといえる。

以上の分析結果を第６章で比較した。女性が描かれるようになってきているものの、いずれの時期においても男性登場人物が多く登場し、女性は比較的描かれていなかった。時期によっては風刺の対象となる役割もあるが、基本的に女性は「女らしく」、男性は「男らしく」あることを求め、期待から外れた人物を笑いや批判の対象とするコントや場面が見られた。「常識を相対化するはずの

お笑い」（澁谷, 2005: 184）であるが、コント番組においてジェンダー規範を逸脱した人物は笑いの対象となることで反面教師となり、規範を強調する。このとき、森下（2003）による笑いの社会的効用のうち、集団凝集性と排除作用、そして社会化と社会統制が働いているといえる。こうしたなかで強調されなくなる妻・母に期待される役割とは反対に、夫・父に期待される威厳は、第四期の以降で風刺の対象となった。バブル崩壊から「失われた 10 年」にかけて放送が開始された第四期と第五期の番組では、「外で仕事をする」役割を担う夫・父の威厳を笑いの対象に選ぶようになったと考えられる。さらに第五期の『笑う犬の冒険』は、会社に振り回される男性を誇張して描くなどして、「外で仕事をする」男性の役割について視聴者に問題提起をして、人生について考えさせているといえよう。このように、ジェンダー規範を強調するだけではなく、規範を対象化して笑いにした。さらに、女性に尽くす男性のように、従来のジェンダー規範とは異なる、新たな価値観も提供していた。